

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520624

研究課題名(和文)意味的特徴の分析技術に焦点化した日本語教師の日本語分析力養成とその教材開発

研究課題名(英文) Training and development of materials to improve the semantic characteristic analytical abilities of Japanese language teachers

研究代表者

坂口 和寛 (SAKAGUCHI, Kazuhiro)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：70303485

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語教師養成講座の被養成者と日本人大学生が類義語分析で行う、言語特徴分析の方法について問題点を探った。被養成者の類義語分析では、正用例文からの情報が意味特徴へ十分に抽象化されにくい。また、対比により意味特徴を探る際に、その基準が類義語対に等しく適切ではなく、分析の妥当性が低くなりうる。さらに、被養成者と大学生は意味特徴の説明で日常レベルの基本的な語や表現を多用し、弁別性を的確かつ簡潔に示す抽象的な語は使わない。以上の成果を基に、言語特徴分析を支えるストラテジーについてトレーニング教材を作成した。

研究成果の概要(英文)：This study investigated some of the problems with a synonym analysis focusing on linguistic characteristics conducted by trainees of Japanese teacher training schools and Japanese college students. The results indicated the following: 1) The trainees tended to fail in successfully extracting abstract semantic characteristics of synonyms when studying correct example sentences; 2) When investigating semantic characteristics by comparing two synonyms, the trainees used inappropriate criteria that couldn't be applied evenly to one of the synonyms, which may lower the legitimacy of their analysis; 3) When explaining semantic characteristics of synonyms, both the trainees and the college students often used basic, daily words or expressions instead of abstract expressions that could accurately and simply show the distinctiveness between synonyms. With these findings, we created strategic training materials to help improve analysis of synonyms focusing on linguistic characteristics.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教師 教師養成 類義語分析 意味分析 ストラテジー ストラテジートレーニング

1. 研究開始当初の背景

日本語教師(以下、教師)の日本語力は一般的に日本語学の学習を通じて養成が図られるが、必要とされる日本語知識は幅広く膨大である。また、瞬時の学習者対応に迫られる現場ニーズから、言語的な説明や例文提示を柔軟かつ即興的に行う能力も必要となる。そのため、日本語学的観点からの知識重視型の日本語力養成だけでなく、日本語分析技術に焦点化した教師養成も必要といえる。

以上より、自律的・能動的な日本語分析技術の養成を目指し、“例文作成・例文分析・言語特徴分析”に関わる日本語分析技術を支えるストラテジーと、その訓練方法を検討してきた。まず、日本語研究方法論の知見から例文作成に焦点化し、教師の類義語分析における例文の作成・分析の手続きについて、日本語母語話者(非教師)との違いを探った。そして、両者が用いる例文の作成・分析のストラテジーの差異をふまえ、例文作成技術の習熟を図る短期訓練プログラムを作成した。しかし、言語特徴の明確化に寄与する例文の作成・利用が十分に促せず、日本語分析技術向上に資する所は限定的であった。そうした問題解決に向け、例文作成・例文分析のストラテジーの詳細な特徴記述とプログラム改善を進めた。そして、“例文作成-例文分析-言語特徴分析”というサイクルに沿った日本語分析を支えるストラテジーについて、総合的運用を促す訓練法を検討し、教材開発を図った。具体的には、“多様な例文作成；具体的な例文の作成；イメージを用いた例文分析”を支えるストラテジーの指導を検討した。教材を試用し調査した結果、言葉の弁別的特徴を示唆する例文の作成と、例文をふまえた言語特徴分析が見られた一方、言語特徴として認めにくい説明や不明瞭で不正確な説明も見られた。

以上のような成果のなかで、例文情報を基に言語特徴を明らかにする分析技術の養成

のために、言語特徴を分析し説明する際の特徴と問題点を把握する必要性が確認できた。さらに、初心者教師や非教師の日本語母語話者が、ワンフレーズでの簡潔な形で言語の特徴を説明する傾向が確認できた。そうした分析は、不明瞭で不正確、不的確になりうる。一方で、日本語指導に関しては言語的説明の簡潔さが重視され、教師用参考書でも文法や語彙についての簡潔な特徴記述が多い。しかし、そのための分析技術は直接的に示されず、教師が自律的に意味特徴分析に臨む手立ては不明である。また、的確かつ正確に簡潔な言語的説明を行うことは、日本語分析技術の熟達度の低い初心者教師には難しさもある。よって、日本語分析において抽象的な言語特徴を的確かつ正確に、そして簡潔に説明できるようになるために必要な日本語分析技術を明らかにし、その向上策を探る必要がある。

2. 研究の目的

簡潔で的確な日本語指導と日本語分析の基礎となる意味特徴分析技術をストラテジーとしてとらえて記述する。さらに、その運用の習熟を通して日本語教師の日本語力を養成する独習型教材を開発する。

- (1)日本語分析技術の熟達度が低い日本語母語話者による日本語分析過程を観察し、意味分析行動の特徴と問題点を探る。
- (2)言語特徴の説明における言語的調整を中心に、意味特徴を明らかにする分析行動とそれを支えるストラテジーを記述する。
- (3)意味特徴を中心に言語特徴を分析するストラテジーについて段階的に習熟を促すトレーニング教材を作成し、有用性を検討する。

3. 研究の方法

(1)意識的な日本語分析の経験がない日本語母語話者(非日本語教師)を対象に、類義語分析における言語特徴分析行動の特徴と問題点を探った。具体的には、日本語教師養成

講座で学ぶ被養成者と、日本語教育経験のない日本人大学生の類義語分析例を収集し、そこから言語特徴分析に関わるストラテジー運用を抽出した。また、類義語の言語特徴を明らかにしようとする言語特徴分析の手続きについて、例文利用との関連性もふまえながら探った。特に、記述された特徴説明について、抽象さや言及された言語特徴、説明方法、説明に用いられた言語表現などに焦点を当て、被養成者と大学生による類義語分析の内容を精査した。また、教師用参考書や辞典での類義語の特徴記述に見られる特徴を整理し、簡潔さや的確さの点を含めて日本語母語話者による分析内容と比較した。以上の方法によって、例文から得られる情報を言語特徴へと抽象化するストラテジーと、抽象的な言語特徴を的確かつ詳細に説明するストラテジーを中心に検討した。

(2)例文の作成・分析との連携に留意しつつ、類義語分析において意味内容を中心に言語特徴を明らかにする分析ストラテジーを段階的かつ系統的に学ぶトレーニング用教材（紙媒体）を作成した。日本語教育初学者と対象とする教材は、ストラテジーの特徴や運用手順、運用の留意点を解説・例示し、練習課題で運用手順の習熟を促すものである。解説・例示部分は視覚的に理解できるよう、プレゼンテーション用ソフトウェアによりスライド型とした。また、指導者の指示に従ってストラテジーを実際に使用し類義語分析を進めるための、練習用の書き込み式ワークシートも作成した。

(3)ストラテジートレーニング用のスライド型教材を日本語教師養成講座で試用し、解説・例示部分および練習課題における内容の不備や教示方法の不十分さを把握した。そして、教材を用いた被養成者の類義語分析内容を手がかりに、解説・例示と練習課題の改善と充実化を図った。特に、教材の内容や提示方法の妥当性や有用性、ユーザビリティに焦

点化した。さらに、教材利用の前後に類義語分析課題を課し、無意識的な類義語分析行動と分析スタイルを確認し、言語特徴分析内容に対する教材利用の影響を探った。

4. 研究成果

(1)長野県内の民間日本語学校による日本語教師養成講座（2011年度）の被養成者（日本語母語話者）15名と講座補助者として講座に参加した日本人大学院生（日本語教育経験者）を対象に、類義語分析における例文分析行動と言語特徴分析行動の問題点を探った。一部講座で本研究代表者がストラテジートレーニングを行うなかで、「映像化ストラテジー」による正用例文分析と、それをふまえた類義語の言語特徴分析を促した。ストラテジーの運用練習として行った類義語分析で被養成者がワークシートに記述したアウトプットから、言及された類義語の言語的特徴との関係性に着目しつつ、ストラテジー使用で正用例文から得た情報を整理し、問題点を精査した。その結果、第一に、言語化された例文映像と、言及された類義語の言語特徴が同一の、もしくは類似した内容となりやすい。例文分析で得た情報がそのまま類義語の言語特徴として示される傾向があり、言語特徴分析過程で例文情報の言語特徴への一般化や抽象化が不十分であることが指摘できる。第二に、被養成者が正用例文から想起した映像を言語化して例文から引き出す情報は、例文が字義通り直接的に示す内容に沿ったもののほか、例文に示されていない事象が連想され言語化される場合があった。具体的には、例文が示す出来事や事態の前後文脈や、例文の話者や動作主を想定してその心情や意図が言語化されるケースである。しかし、連想による例文映像の言語化では、例文自体の直接的内容に対し周辺的事象が言及されることとなる。そして、そうした例文情報を基にした言語特徴分析の内容は、結果として類義

語の弁別的特徴と乖離したものとなりやすく、妥当性に問題が生じうる。

(2)日本語教師養成講座で学ぶ日本語母語話者(被養成者)が類義語分析で行う言語特徴分析について、その特徴と問題点を探った。対象とした被養成者は、(1)と同じ日本語教師養成講座の受講生 15 名である。ストラテジートレーニング実施前に行った類義語分析課題で、被養成者がワークシートに記述した類義語対「わがまま / かって」の特徴説明を分析した。これにより、類義語分析ストラテジーを学ぶ前の被養成者による無意識的な類義語分析を観察し、言語特徴分析における分析観点と分析手続きの傾向と問題点を探った。その結果、第一に、被養成者の無意識的な類義語分析では、意味内容に焦点化して類義語の弁別的特徴を探るといった基本的姿勢が認められた。一方で、意味内容以外にも用法や使用場面に焦点化して類義語の特徴説明を行う傾向も見られたが、意味特徴をまったく言及せずに用法面の特徴のみ説明するケースも若干ながら見られた。さらに、用法と意味内容が未分化の状態で言語特徴が説明されるケースも把握できた。こうした用法への焦点化も見られるものの、無意識的な言語特徴分析において被養成者は意味内容を重視する傾向が強い。第二に、分析手続きに関しては、同一の基準で類義語同士を対比することで弁別的特徴を説明しようとする傾向が把握できた。被養成者は、類義語間の共通性や類似性を意識しつつ、比較対照によって類義語対の相違点や差異を明確に示そうとする。一方で、同一基準での対比から類義語対の特徴を説明づけようとする中で、かえって説明の妥当性が低くなる場合が見られた。ある基準の使用は、類義語対のうち一方には適切かつ有用であっても、他方の語の特徴づけには適切ではない可能性があり、結果的に不十分な言語特徴分析となりうる。こうした問題を本研究では「対比の罨」と呼

ぶが、類義語の言語特徴分析では、対比が必ずしも有効な分析手続きとはならない。

(3)長野県内の民間日本語学校で 2012 年度と 2013 年度に実施された日本語教師養成講座の被養成者 15 名と日本人大学生 35 名を対象に、類義語分析における言語特徴分析の内容を精査した。二つの類義語分析課題(「なまける / さぼる」と「ひそかに / こっそり」)を遂行するなかで両者がワークシートに記述した類義語の特徴説明を、使用された言語形式に着目してテキストマイニングの手法で分析した。被養成者と大学生が類義語の特徴説明に用いた言語形式には、際立った違いが見られなかった。しかしながら、両者の属性や経験に基づく言語使用によって類義語の弁別的特徴を説明づけようとする傾向が窺えた。また、両者の特徴説明に共通する傾向としては、第一に、日常レベルの基本的な語句や表現の使用が挙げられる。そうした語句や表現によって、類義語対の意味特徴の中核部分が平易に説明されていた。その半面、日常レベルの基本的な語や表現では、類義語間の微妙な意味上の差異や弁別性が十分に説明しきれず、言語特徴の説明が深まらないという問題が認められた。以上の点に関係して、第二に、言語特徴分析において被養成者と大学生は、類義語の弁別的な意味特徴を的確かつ簡潔に示しうる抽象度の高い語句を用いない傾向がある。日本語指導では文法や語彙の説明に簡潔さが求められるが、日本語分析技術の熟達度が低い日本語母語話者の場合は、簡潔な語句を用いて弁別的特徴を端的に説明することは困難と考えられる。半面、擬態語や具体的事物を表す名詞、モダリティを示す表現形式などの平易な言語形式の使用が特徴的である。この点から、簡潔な言語形式を用いた特徴説明は、高度で困難なメタ言語知識と分析技術を要することが指摘できる。以上のほか、類義動詞や類義様態副詞が示す動きや行為そのものではなく、動作主

の内面である行動意図や心理状態に焦点を当てて説明する傾向が、特徴説明の際の言語使用から認められる。

(4)長野県内の民間日本語学校による日本語教師養成講座において類義語分析ストラテジートレーニングを実施し、類義語分析技術の意識化と熟達度が不十分な被養成者への試作版教材を試用した。そして、被養成者からのフィードバックや練習用ワークシートへのアウトプットを手がかりに、トレーニング教材(紙媒体)の加筆修正を行った。まず、2012年度の講座における教材試用を経て、正用例文を分析するストラテジーである映像化ストラテジーの運用方法を中心に、トレーニング項目の内容と配列を検討した。特に、正用例文が字義通りに示す直接的内容に沿った形で、例文から想起した映像を言語化することを手続きの基本に据えた。さらに、映像化で得た具体的で個別的な例文情報を、類義語の抽象的な意味特徴へと一般化してまとめる手続きについて、教材化を試みた。また、2013年度養成講座での試用を経て、言語特徴分析において類義語の意味内容を明示的に説明するためのストラテジーとその運用方法を中心に、解説部分を加筆修正した。特に、意味特徴の説明に用いる語句や表現、用語に関する解説と運用練習の充実化を図った。具体的には、類義語の品詞性に着目した意味特徴の説明、同一基準での対比を利用した特徴説明の留意点、語彙や文法の説明に使用されやすい抽象的で簡潔な語句とその言い換え、といった分析手続きに焦点を当てた。以上の点に関する解説は、類義語の特徴説明に用いる表現形式への意識化と、手続きおよび内容の両面から言語特徴分析をモニターする観点を示すことを図るものである。

以上のような本研究の成果に対して、課題も残されている。第一に、トレーニング用教材の改善と修正に関係して、言語特徴分析ストラテジーの運用練習が十分に備えられな

かった。トレーニング用教材は、指導者が介在せずに提示され学べる独習型教材への発展を視野に置いている。今後は、言語特徴分析を支えるストラテジーとその運用方法について具体例と練習課題を数多く提示し、理解を深めたうえで円滑なストラテジー運用を促せる教材へと充実化する必要がある。第二の課題は、映像化ストラテジーで正用例文から得られる周辺的事象の情報から類義語の意味特徴を的確に見出す手続きに関する検討である。連想により例文から得る情報は、類義語の意味特徴などの発見に直結しにくいものが多い。しかし、そうした具体的情報を再分析して適切に活用できれば、言語特徴分析に有用な手続きとなる。例文情報を言語特徴に一般化する手続きと併せて、さまざまな例文情報を言語特徴分析に活用する手続きを探る必要がある。第三の課題は、類義語の意味特徴を的確かつ明示的に説明するための言語的調整やメタ言語の記述と整理である。そのためには、類義語分析例をさらに収集し、類義語の弁別的特徴を説明する際に用いる語句や表現、用語について調査と分析を進める必要がある。そして、言語特徴を簡潔かつ的確に説明する技術と、平易な言語形式を用いて詳細かつ具体的に説明する技術を、関係づけつつ明らかにすることも求められる。以上の課題への取り組みを中心として、意味特徴を明示的に説明するための言語特徴分析ストラテジーについて理解と意識化を促し、運用を向上させるトレーニングのあり方を検討する。そして、日本語分析に不慣れな被養成者や初心者教師が、類義語分析を主とした日本語分析の技術を修得し向上させられるよう、日本語分析ストラテジーの観点から日本語力の養成方法とその教材化を進めていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1)坂口和寛,「日本語教師養成講座の受講者が行う類義語の言語特徴分析 類義語の特徴説明に見られる傾向と問題点」,『信州大学人文科学論集』(信州大学人文学部),第1号(通巻48号),pp.243-254,2014年,査読有

<http://hdl.handle.net/10091/17478>

(2)坂口和寛,「日本語母語話者の類義語分析における正用例文分析の特徴と問題点—「映像化ストラテジー」による例文分析について」,『信州大学国際交流センター電子紀要』,論文番号6,pp.1-13,2013年,査読有

http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/suic/upload/pdf/publications/ekiyou_6.pdf

6. 研究組織

(1)研究代表者

坂口 和寛 (SAKAGUCHI, Kazuhiro)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号:70303485